

1860年代以降におけるロシアと清の茶貿易

—モスクワ、キャフタ、漢口を結ぶ流通の視点から

森 永 貴 子

はじめに

本稿の目的は、1860年代から清朝中国に進出して製茶業を行ったロシア商人の活動を明らかにし、19世紀後半から20世紀初頭のロシア茶貿易が国際貿易の中で有した意義について考察することである。ロシアでも茶貿易史は関心を持たれつつあるが、はじめに本稿でこのテーマを取り上げる理由と、先行研究について説明する。

近年、流通史・文化史の領域において「茶の歴史」研究が盛んとなっている。「茶の歴史」は17-18世紀におけるイギリスのコーヒーハウスを始め、産業革命、アメリカ独立戦争、19世紀のイギリス・インド・中国間の三角貿易などと深く関連しているため、従来の研究においては必然的に「イギリスの茶貿易史」が主要対象となってきた。しかし清朝中国との茶貿易を通じて喫茶慣習が浸透したのは当然イギリスだけではない。例えば独立戦争の発端となったボストン茶会事件は、18世紀のアメリカ社会に喫茶慣習が深く浸透していた事実を背景とし、イギリス東インド会社の輸出入特権により茶の流通が制限されていたために、植民地の「愛国心」が扇動されて起こった¹。日本においても、角山栄はイギリスと日本からの視点を軸に、茶貿易史研究を行った²。

一方で、ユーラシア大陸の大部分を占めるロシアは自国を重要な喫茶文化圏として認識し、茶を「伝統文化」の一つに位置付けている。またロシアは内陸貿易ルートを擁したことから、東西の接触を通じ喫茶文化を受容するという複雑な歴史をたどった。近年の「茶の歴史」研究は、こうしたロシアの茶文化を含め、広東貿易で茶を取引したイギリス、オランダ、スカンジナビア諸国、茶の生産中心地である中国の「茶馬古道」や日本の茶道までも内包するグローバル・ヒストリー研究へと発展しつつある³。

1 William H. Ukers, *All About Tea*, Martino Pub., 2007. (初版はNew York: Tea & Coffee Journal, 1935)

2 角山栄『茶の世界史 緑茶の文化と紅茶の社会』中公新書、1980年

3 M. Avery, *The Tea Road: China and Russia meet across the steppe*, China International Press, 2003; Beatrice Hohenegger, *Liquid Jade: The Story of Tea from East to West*, St Martins Pr., 2007. (邦訳：ビアトリス・ホーネガー『茶の世界史 中国の霊薬から世界の飲み物へ』白水社、2010年); Victor H. Mair,

ロシアにおける茶貿易史研究はすでに19世紀半ばから見られた⁴。帝政時代の経済学者 A. П. スポーティン はロシア貿易史の専門家であり、その研究を基礎に同時代のロシアを軸とする包括的茶貿易史研究書を刊行した⁵。しかしソ連時代に入ると、茶貿易史研究は停滞する。これはソ連史学においてイデオロギー的制約から工業史研究への極端な偏りが生じたためである。少なくともこの時期の学会論文を参照する限り、流通史や文化史への関心が薄れている傾向にある。一方でロシアの茶貿易史と密接な関係にある露清貿易史研究では、主に外交史と総合的な貿易統計史料に焦点が当てられてきた⁶。これらは露清貿易史の概要を知るうえで有益な業績であり、手堅い先行研究であるが、貿易の現場で活動した露清両国の商人や、モンゴル人、ブリヤート人などの周辺諸民族による取引、利害関係、社会構造など、流通史の様々な問題に関してほとんど注意が払われてこなかった。さらにソ連時代には商人を研究対象として取り上げること自体、アカデミックな研究と見なされなかったことも要因だろう。ソ連時代の「茶文化研究」としてはかろうじて、ポプリョプキンの『茶、そのタイプ、特性、消費』（1981）などが存在するが、これは現在のロシアでも非常にユニークな文化史研究書として再版され続けている⁷。

ソ連時代の停滞を経て、近年のロシアでは再び茶貿易史・茶文化史研究が行われつつあり、その中で主導的役割を果たしているのがイヴァン・アレクセーヴィチ・ソコロフである⁸。彼の研究は主に文化史的・系譜学的視点からロシアの茶商人を分析しているが、こ

Erling Hoh, *The True History of Tea*, Thames & Hudson Ltd., London, 2009. (邦訳：ヴィクター・H・メア／アーリン・ホー著、忠平美幸訳『お茶の歴史』河出書房、2010年)；Enrika Rappaport, *A Thirst for Empire: How Tea shaped the Modern World*, Princeton University Press, 2017.

- 4 例えばグリゴリエフ『茶』（ペテルブルク、1855）はロシア茶貿易史の概要を簡潔に説明している。Я. И. Григорьев, *Чай: [Очерк]*, СПб., 1855.
- 5 А. П. Субботин, *Чай и чайная торговля в России и других государствах. Производство, потребление чая*, СПб., 1892.
- 6 例えば、Е. П. Силин, *Кяхта в XVIII веке, Из истории русско-китайской торговли*, Иркутск, 1947; М. И. Сладковский, *История торгово-экономических отношений народов России с Китаем. (до 1917г.)*, М., 1974. 日本では吉田金一の研究が基本的な先行研究として知られる。吉田金一「ロシアと清の貿易について」『東洋学報』第45巻4号、1963年8月、pp.39-86；吉田金一『近代露清関係史』近藤出版社、1974年
- 7 В. В. Похлебкин, *Чай, его типы, свойства, употребление*, М.: Лег. и Пищ. Пром-ть, 1981. ポプリョプキンはもともとスカンジナビア諸国の国際関係史が専門であるが、その後世界の「民族料理」研究も行っていたユニークな歴史家である。上記の研究書に加え、のちにウォッカの歴史を加筆したのも刊行している。В. В. Похлебкин, *Чай и водка в истории России*, Новосибирск, 1995.
- 8 ソコロフは2008年刊行の著書（И. А. Соколов, *Чаеторговцы Москвы, члены их семей, некоторые предки и отдельные потомки; 1700-е – 1990-е годы. Биографический справочник*, М., 2008）を皮切りに、ロシアにおける茶の取引従事者について現在まで精力的に著書を刊行している。本報告では紙幅の関係上、その一部にしか触れない。

れは現在のロシア史学における「商人史」「企業家史」研究の流行に負うところが大きい。こうしたロシア史学の潮流の変化はソ連崩壊以降顕著であるが、さらに現在のロシア史学の動向に同じく大きな影響を与えているのが、ヨーロッパ、アメリカにおける歴史学の変化である。

近年のグローバル・ヒストリー研究の進展により、経済史の分野では特定の国、地域、都市の境界線を越えて活動する商人や、輸送・流通の担い手たちの歴史に目が向けられるようになってきた。このような経済史的視点の研究では、ウォーラーステインが1974年以降の著作で提唱した「近代世界システム論」がよく知られており、彼は17世紀以降における国際商業の緊密化をヨーロッパの視点から論じ、貿易、生産のために境界線を越えて大西洋、太平洋へと進出したヨーロッパの拡大に焦点を当てた⁹。現在でも近代における「覇権国家」としてのイギリス、アメリカ合衆国を主要研究対象とする経済史研究は盛んであり、特に大西洋史研究の進展、見直しが継続的に行われている¹⁰。

その後のウォーラーステイン批判が端的に示すように、ソ連崩壊以前の歴史観はヨーロッパを経済発展の「モデル」と考えるヨーロッパ中心史観を前提とし、17世紀以前のアジアの成長・発展については重要視してこなかった。しかし現在ではアジア諸国の経済成長という国際的变化により、「ヨーロッパ対アジア」といった単純な対立構造による歴史観は一般的ではなくなってきた¹¹。むしろ社会構造から見て、非常によく似ていたはずのヨーロッパとアジアが、17世紀以降に大きく「異なる世界」へと別れた要因に関心が向けられつつあり、その中で経済、制度をはじめとする個別の問題をより客観的に分析する傾向が出てきた¹²。

9 Immanuel Maurice Wallerstein, *The Modern World-System: Capitalist Agriculture and the European World-Economy in the Sixteenth Century*, Academic Press, 1974 (邦訳: I. ウォーラーステイン著、川北稔訳『近代世界システム (1) 農業資本主義と「ヨーロッパ世界経済」の成立』岩波書店、2006年)

10 例えば、以下を参照: バーナード・ベイリン著、和田光弘訳『アトランティック・ヒストリー』名古屋大学出版会、2007年 (Bailyn Bernard, *Atlantic History*, Harvard University Press, 2005) 大西洋史に関する研究書は近年他にも多数出版されている。

11 このような「近代世界システム論」批判の一つとして、フランクの『リオリエント』が刊行された。Andre Gunder Frank, *ReOrient: Global Economy in the Asian Age*, University of California Press, 1998. (邦訳: アンドレ・グンダー・フランク著、山下範久訳『リオリエント』藤原書店、2000年)

12 例えば2000年に刊行されたケネス・ポメランツの『大分岐』は当時の経済史研究に一石を投じており、日本でも議論が行われている。Kenneth Pomeranz, *The Great Divergence: China, Europe, and the Making of the Modern World Economy*, Princeton University Press, 2000. (邦訳: ケネス・ポメランツ著、川北稔訳『大分岐—中国、ヨーロッパ、そして近代世界経済の形成』名古屋大学出版会、2015年) イギリス帝国史が専門の秋田茂氏は、近年アジアからの視点で多くの論集を刊行している。さしあたりすでに刊行されているものとして以下を挙げておく: 秋田茂編『アジアからみたグローバル・ヒストリー: 「長期の18世紀」から「東アジアの経済的再興」へ』ミネルヴァ書房、2013年

こうした近年の歴史研究の動向の中で、近代以降の茶貿易史研究では中国の「自由貿易」である広東システムや、イギリスなど欧米社会における喫茶の流行、英領インドを中心とする植民地の茶樹園経営史などが注目され、膨大な数の研究書が刊行されてきた。一方で茶貿易史は欧米における茶文化の形成、陶磁器生産の実現、コーヒーハウスなど社交場の出現といった、文化史的側面とも深く関わっていた。逆にこうした文化的流行が、19世紀以降の茶の消費と貿易に大きな変化をもたらし、相互に大きく影響しあってきた。近世以前、茶は中国、日本などのアジアを中心に栽培され、その情報や技術は長い間ヨーロッパに対し秘匿されてきた。しかし、イギリスはインド植民地を拠点にしつつ、中国へのプラント・ハンター派遣、中国人職人の雇用などを通じ、その栽培技術を習得した。そして大規模生産に成功することで、中国による茶の輸出独占をつき崩した。このことは喫茶慣習の世界的普及という点でインパクトが非常に大きかったと考えられる。

以上のようにイギリスをはじめとするヨーロッパ側の努力があったものの、天津条約で開港した上海、天津においてもイギリス商人の茶の貿易量は常に大きな比重を占め、19世紀において、清は依然重要な茶の生産地であった。極東地域へのヨーロッパ諸国参入という点では、ロシアも17世紀以降、シベリア経由で清と独自の貿易関係を構築した。ヨーロッパ諸国が「海路の」広東貿易を行ってきたのに対し、ロシアは「陸路の」キャフタ（恰克図）を拠点に中国貿易を行ってきた。一般に「キャフタ貿易」として知られる露清貿易は、19世紀初頭まで「ロシアが清に毛皮を売るための貿易」だった。こうした露清貿易の性格はシベリアの豊富な毛皮資源、清朝中国における満州貴族のクロテン消費、中国全土への毛皮の流行拡大に支えられていた。その後毛皮資源の枯渇と清の毛皮需要減退により、キャフタ貿易は「清がロシアに茶を売るための貿易」へと変化し、茶貿易はロシア商人にとってアジア市場と繋がる重要手段となった。

キャフタ貿易は「朝貢貿易」と異なる民間自由貿易の「互市」であり、なおかつ金銀決済を禁じる「バーター貿易」を特徴とした¹³。しかし1850年代の太平天国の乱と、イギリス、アメリカ合衆国などからの資本主義的「自由貿易」の潮流により、キャフタ貿易は制度変革を迫られた。その中で現場のロシア商人たちは新たなビジネス・チャンスを見出し、行動範囲を拡大した。その一つが漢口への進出と、中国市場における製茶業の開始である。イギリスの茶貿易に隠れて見すごされがちであるが、中国市場に直接参入して製茶業を行ったのはロシア商人だけであり、イギリス商人は中国人仲介業者から茶を輸入しつつも、インド茶の生産に注力した。このようなロシア商人の積極的な活動は、「互市」と

13 キャフタ貿易の個別の問題については後述するが、さしあたり以下を参照：吉田金一「ロシアと清の貿易について」；岸本美緒『清代中国の物価と経済変動』研文出版、1997年、pp.176-178；森永貴子『イルクーツク商人とキャフタ貿易—帝政ロシアのユーラシア商業』北海道大学出版会、2010年

してのキャフタ貿易において長年商品知識を蓄積し、マーケティング努力を行い、商人間のネットワークを構築してきたという歴史的背景に負うところが大きい。

ロシア商人の漢口進出については、近年Lee Chinyun（李今芸）による英語論文があり、その中でLee氏はイギリス、日本の新聞資料や研究書、中国語に翻訳されたロシア側の概説書、中国側の論考などを総合し、以下のように指摘している。曰く、ロシア商人の製茶会社は自ら茶を選別し、積極的な技術革新を行うなど、様々な企業努力を行っていたにもかかわらず、中国市場そのものに関心を示さず、アメリカやオーストラリア市場への売り込みも行わず、イギリス商人や日本商人のように市場拡大をしなかった。その原因はロシア商人が事業においてあまりにも帝政ロシア政府に依存していたためであるという¹⁴。李氏が指摘するように、ロシア商人の事業はロシア市場を軸に展開しており、「現在の国際貿易」の視点に立つならば、限られた範囲の活動だったと言えるだろう。

しかし19世紀当時の帝国主義的潮流の中で、ロシア商人たちはむしろロシア・清両帝国の政策や規制に翻弄されつつ、それまで蓄積した知識と経験を基に事業継続の努力を行っていた。その結果、ロシア商人は19世紀末から20世紀初頭にかけて、最大の中国茶消費国となり、イギリス商人の中国茶輸出を凌駕するに至った。こうした事業活動において、革命による体制転換から生じた政治的混乱と、経済動向の変化とを、単純比較はできない。比較するためには新しい政府の経済政策、社会の混乱や法の隙間を突いた民間商人の活動などについて、それぞれの角度から分析を行う必要があるだろう。

本稿では、以上の先行研究と問題点を踏まえ、19世紀半ばに生じたキャフタ貿易の危機的状況と、ロシア商人が漢口へ進出するに至った経緯を明らかにする。そのうえで、漢口におけるロシア人の製茶工場に関するロシア側資料の情報を中心に、ロシアの茶貿易の意義について考察する。なお、テーマの性質上、本稿第1節では『ロシア史研究』に掲載した論文の情報を含むことをあらかじめお断りしておく¹⁵。

1. キャフタ貿易におけるロシア商人の構造と1850年代の危機

ロシア商人の漢口進出に触れる前に、キャフタにおける貿易構造と、これに従事したロシア商人の実態を見ていこう。1860年代以降におけるロシア商人の漢口進出は、それ以前のキャフタ貿易における流通ルートと商人の構造を知らなければ理解できない。1727年のプーラ条約、1728年のキャフタ条約によって開始されたキャフタ貿易は、商品の交

14 Lee Chinyun, "From Kiachta to Vladivostok", *Region*, Vol3, No2, 2014, pp.195-218. 上記論文の分析対象はロシア商人であるが、同じくキャフタ貿易で活動した山西商人を扱った論考として以下の中国語論文がある。李今芸「恰克圖茶葉貿易與晉商（1862-1917）」『漢學研究』28-3、2010年9月、167-196頁

15 森永貴子「モスクワ商人とキャフタ危機—公文書が示す一九世紀露清貿易の構造と変化」『ロシア史研究』100号、2017年12月、pp.119-144.

換比率をあらかじめ設定し、金銀決済をせずに商品そのものを交換する「バーター貿易」として行われた。これは露清両国が銀の流出を恐れ、貨幣決済を禁止したためである。

ロシアから清に朝貢使節団を送っていた北京貿易と異なり、キャフタ貿易は条約によって「無関税」「民間貿易」を前提とし、その意味で当時は「自由な」貿易であった。さらにロシア政府はキャフタからの毛皮輸出を禁止し、北京貿易の毛皮取引によって利益を独占しようとした。しかしこの原則は密輸の横行によって早々に崩れ、新関税規則交付（1755）、キャフタからの毛皮輸出解禁（1762）によって、民間商人による毛皮貿易を事実上容認した。1762年以降のキャフタ貿易では露清両国が互いに自国商人に関税を賦課している事実を隠しながら、貿易額は増加した。しかしキャフタ貿易自体が露清間の安全保障上の危うい均衡の上に成立しており¹⁶、清朝政府はロシア側の関税賦課や、国境帯周辺に住む先住民のロシア領逃亡事件を口実として、しばしば一方的に貿易停止を宣言した¹⁷。しかし18世紀において清はロシアの重要な毛皮輸出先であり、満州貴族をはじめとする中国人の毛皮需要は依然として大きかった。ロシア人の北太平洋進出とアラスカ占領が行われた背景には、こうした中国市場への毛皮輸出の増加があった。このため1792年にキャフタ貿易が再開されて以降、露清間の貿易が停止されることはなくなり、バーター貿易の仕組みは残しつつも、関税徴収を容認する形で貿易が継続した。

キャフタ貿易に従事した中国商人は主に山西商人だったことが良く知られている¹⁸。中国商人は国境線を挟んでキャフタと向き合うマイマチェン（買売城）に居住し、店舗を構えた。一方のキャフタ側にはロシア帝国内の広大な地域から集まった多様な都市の商人たちが毛皮・皮革販売のために滞在し、キタイカ（綿織物）などの中国商品を購入した¹⁹。18世紀の段階でシベリアには毛皮利益に惹かれたヨーロッパ・ロシアからの商人が移住していたが、シベリア商人は資金的にもギルド商人の数としても弱小であった。その中でキャフタの後背地として東シベリアの交通の要衝にあり、毛皮の集散地であったイルクーツクにおいて、毛皮事業を基盤とする商人層が育ち始めていた。その一方で、ヨーロッパ・ロシアからは北ロシア、中央ロシアを中心に多くの商人がキャフタの取引に訪れたが、そ

16 柳澤明「キャフタ条約以前の外モンゴル－ロシア国境帯」『東方学』77号、1989年1月、pp.1-15；柳澤明「1768年の「キャフタ条約追加条項」をめぐる清とロシアの交渉について」『東洋史研究』62巻3号、2003年12月、pp.568-600

17 И. В. Щеглов, *Хронологический перечень важнейших данных из истории Сибири. 1032-1882 г.*, Сургут, 1993, С. 153. (Иркутск, 1883の再版)；吉田金一「ロシアと清の貿易について」p.48.

18 Н. А. Носков, *Кяхта*, Иркутск, 1861, С.2.

19 Г. Ф. Миллер, *Описание о торгах сибирских*, СПб., 1756, С.41；П. С. Паллас, В. Зуев (перевел), *Путешествие по разным провинциям Российского Государства, Часть третья, половина первая, 1772 и 1773 годов*, СПб., 1788, С.182-183.

の中でも資金、数においてモスクワ商人が主導的な位置を占めた²⁰。これらの商人の中から北太平洋の毛皮事業に出資する商人が現れ、後のロシア・アメリカ会社の源流となるグループを形成した。

19世紀に入ってもキャフタでは多様な都市のロシア商人が取引に従事していた。しかし1820年代、30年代になるとその構造に変化が生じた。まず貿易品目の視点から見ていこう。1810年頃までに清からロシアへの貿易品目に占める茶の取引高は綿織物を上回るようになり、茶の輸入割合が急増した²¹。また1820年代以降ロシアから清への毛皮輸出が減少し始め、これに代わって外国産毛織物、綿織物の輸出が増加した²²。しかしこれは清がイギリスから輸入した毛織物に押され、ロシアから清への外国製毛織物・綿織物の再輸出は伸びなかった²³。しかし1830年代からロシア製の毛織物・綿織物輸出が本格的に増加し、やがて綿織物輸出が大きな比重を占めるようになった。

こうしたロシア側のキャフタ貿易変化の要因の多くが「茶の輸入増加」に起因する。グリシャムバロフの統計によると、1801年に清からロシアへ輸入された茶は約49,000プード（約802,620kg）であったのが、1850年には約317,000プード（約5,192,460kg）に増加した（グラフ1）。統計上は50年間で約6倍の増加となっているが、この統計数値には当時禁じられていたバルト海、ロシア西部国境経由の広東茶の密輸が含まれていない²⁴。このことから、上記期間の茶の輸入量は、グリシャムバロフら同時代の研究者の統計数値をはるかに上回っていたと推測されている。

茶の輸入増加がロシア輸出に影響したのは、キャフタ貿易が依然「バーター貿易」であり、金銀決済ができなかったためである。つまりキャフタでより多くの茶を購入するため

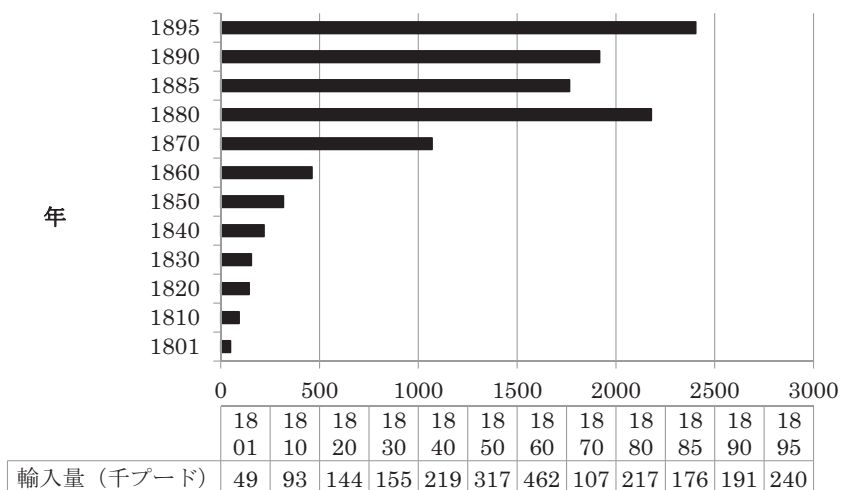
20 Ю. В. Гагемейстер, *Статистическое обозрение Сибири. Часть 2*, С.593; А. Корсак, *Историко-статистическое обозрение торговых сношений России с Китаем*, С.94; X. Трусевич, *Посольския и торговыя сношения России с Китаем. (до XIX века)*, С.245.

21 *Труды статистического отделения департамента таможенных сборов, Статистическая сведения о торговле России с Китаем*, СПб., 1909, С.9.

22 *Труды статистического отделения департамента таможенных сборов, Статистическая сведения о торговле России с Китаем*, С.8; *Краткий очерк возникновения, развития и теперешняго состояния наших торговых с Китаем сношений через Кяхту*, М., 1896, С.38

23 *Краткий очерк возникновения, развития и теперешняго состояния наших торговых с Китаем сношений через Кяхту*, С.36-37.

24 「広東茶」とは、広東貿易によってイギリスなど欧米諸国の船が海路で運んだ茶のことを指す。ロシアには事実上イギリス船で茶が運ばれたと推測されている。当時清との貿易はキャフタのみを通じて行われ、海路経由の茶の輸入は法的に禁じられていた。にもかかわらず、広東茶は船による安価な輸送費、高額関税を免れていたことによる低価格から、一般の人々の需要が高く、ロシア政府は密輸撲滅に苦慮していた。



グラフ1 ロシアの茶輸入量

出典：Ст. О. Гулишамбаров, *Всемирная торговля в XIX в и участие в ней России*, СПб., 1898, С.36.

には、単純に対価として交換する商品を増やさねばならない。1820年代までは毛皮が交換商品の役割を果たしていたが、茶の輸入が増加すると毛皮だけでは不足するようになった。バスター貿易の仕組みが変わらないため、ロシア側は ①茶の輸入増加に対応して、交換商品としての工業製品輸出を増やす必要に迫られ、②これに18世紀末からヨーロッパ・ロシアで始まっていた毛織物、綿織物生産の近代化が成果を現し、1830年代以降アジア市場をターゲットとするロシアの繊維工業生産が拡大した。すなわち茶の輸入増加はまずロシア側の外国製繊維製品の中継輸出を促し、続いてロシア製繊維製品の生産を刺激した。当時農奴制が根強く残っていたロシアにとって、清を始めとするアジア諸国に向けて国内需要の見込めない工業製品を輸出できたことは、工業生産が成長する基盤となった。このような貿易変化において、モスクワの工場主たちはキャフタの山西商人を通じて綿織物製品の大きさ、色、模様などの嗜好を積極的にマーケティングし、そのためキャフタは中国人向け商品輸出の重要窓口となった²⁵。

キャフタ貿易の輸出入品目変化と並行して、キャフタ貿易に従事するロシア商人の構造も変化していった。シベリア商人の中ではイルクーツク商人、バイカル湖西部のザバイカリエ地方の商人²⁶が徐々に成長し、1820年代から取引量を増やしていった。ヨーロッパ・ロシア商人は相変わらず資金面で優位に立っていたが、彼らの間で競争と淘汰が進み、や

25 この点に関しては、塩谷昌史『ロシア綿業発展の契機—ロシア更紗とアジア商人』知泉書館、2014年に詳しい。

26 例えばヴェルフネウディンスク、セレンギンスクに加え、従来商人が居住しない町であったキャフタに居住し、ギルド登録して成長したバスニン、クリュコフなどの商人が含まれる。

がてモスクワ商人が圧倒的優位に立つようになった²⁷。これは当時の「キャフタ茶」が非常に高価な商品であったことに加え、茶の高関税を支払うために資金力のある商人でなければ事実上参入できなかったからである。さらに毛織物、綿織物の工場所有者の方がキャフタで茶と交換できる商品を準備できる点で一般の商人よりも有利となり、その生産工場所有者が多かったモスクワ商人がキャフタ貿易＝茶貿易の主導権を握った。またロシアからの毛皮輸出が減少したことはシベリアの地元商人にとって不利に働いたが、イルクーツク商人の新しい世代はそれまでの毛皮業者を押し分け、バスニン家のように茶貿易へと転換して成功する者が出てきた。

アヘン戦争（1840-42）の時期には、戦争がキャフタ貿易に影響を与えることが懸念されたが、主に内陸に存在する茶の輸送ルートに大きな影響はなかったため、問題はなかった。影響があったとすれば、アヘン戦争終結直後の1843年に、イギリスを含むヨーロッパ諸国の船が運んだ大量の茶をさばききれず、余剰在庫がロシアに流れ込んだことで同年のキャフタ貿易が減少したくらいであった。むしろ1840年代は商人側の懸念に反して貿易額が増え、「キャフタ貿易の黄金期」となった²⁸。こうした貿易額の増加に伴い、キャフタ貿易に従事する商人の中で「バーター貿易」への不満が大きくなった。金銀決済ができないことで、商人たちが茶貿易の手続きに不便を感じていたからである。しかしこの意見は必ずしも大勢を占めていたわけではない。1837年に金融大臣カンクリン宛に提出された請願では、「バーター貿易が中国へのロシア工業製品輸出を支えている」という理由で、バーター貿易支持が訴えられ、現状維持が確認された²⁹。これは特にモスクワ商人の声を反映しており、1841年以降は茶の関税引き下げも徐々に行われた。

こうした状況があった一方、ロシアは1851年にイリ条約を締結し、ウルガ（ウラン・バートル）、クリジャにロシア領事館を開いて清との新たな内陸貿易窓口を開こうとした。しかし太平天国の乱（1851-64）が起ると、清国内の茶の輸送ルートに深刻な打撃を与え、1853年にはキャフタへの茶の搬入が激減し、貿易は危機的状況に陥った³⁰。このとき再び「金銀決済」問題がキャフタ商人³¹からロシア政府に対して訴えられた。彼らは先述の「広東茶」の密輸に強い危機感を抱き、打開方法を議論した。この結果、1854年8月6日の勅令により、キャフタで工業製品総額の三分の一ないし毛皮総額の二分の一を銀製品で支払うこと、キャフタ経由で清に金・銀を輸出することが許可された³²。さらに1855

27 РГАДА, Ф.183, Оп.1, Д.82А, Л.8-9об.-11.

28 А. Корсак, *Историко-статистическое обозрение торговых сношений России с Китаем*, С.168-169.

29 РГАДА, Ф.183, Оп.1, Д.48, Л.1-4об.

30 РГИА, Ф.19, Оп.3, Д.469, Л.11об.

31 この場合の「キャフタ商人」はあくまで「キャフタ貿易に従事する商人」であって、主要参加者であるモスクワ商人、イルクーツク商人など多様な都市を含む貿易関係者たちのことを指す。

32 РГИА, Ф. 1265, Оп. 3, Д. 107, Л. 2.

年8月5日の勅令ではキャフタにおけるバーター貿易規則自体が廃止された。ヨーロッパ諸国が「自由貿易」を求めて清に条約締結を迫る中、キャフタ貿易はようやくこの時期から「貨幣による自由取引」へと転換した。

以上、ロシア商人が漢口に進出する以前の露清貿易の状況について概観した。すでにモスクワ商人を中心とする茶貿易のネットワークが構築され、シベリア商人がその動きを追って成長していた中で、伝統的なバーター貿易という取引方法が太平天国の乱の余波で終焉した。イギリス型「自由貿易」の潮流とグローバル化の波の中で、ロシア商人たちはキャフタ貿易の制度転換後まもなく、中国市場への直接進出を試みた。

2. ロシア商人の漢口進出と製茶工場

清朝に対する東シベリア総督ムラヴィヨフの強硬な外交姿勢と、アイゲン条約（1858）による沿海州のロシア併合は、イルクーツク商人を始めとするシベリア商人の目を極東に向けさせた³³。従来清に対する「善隣友好」姿勢を伝統としていたロシア政府はこの時を境に外交方針を大きく転換させ、軍事的圧力を強めた。

1860年、天津条約の批准が清と英仏露米の間で行われ、同年イギリスが早速揚子江へ調査隊を派遣し、漢口にイギリス租界を設けた。漢口は古くから「九省の会」と称され、内陸部の交通・流通の要衝であり、特に湖北省、湖南省、江西省、安徽省で生産された茶の集散地だったことがよく知られている³⁴。イギリス租界の設置から20世紀に至るまで、漢口は中国内陸部の商工業中心地として発展していった。

ロシアは1896年ようやく漢口に租界を設けたが、これよりも30年以上前、1861年からロシア商人が茶貿易のため漢口へ進出し始めた。モスクワ商人を含む「キャフタ商人」たちは中国語、英語などの知識が全くない状態にもかかわらず、ロシア商品と貨幣を携えたキャラバンを出発させた。1862年には中国人請負人を仲介業者として、茶の発注主であるロシア商人たちが湖北省、湖南省の茶の生産地へ自ら出かけ、磚茶の製造方法を視察した。K. A. ポポフ『中国における茶と、ロシア人による製茶について』（モスクワ、1870）によると、このとき製茶工程作業は全て中国人の手中にあり、湖北省・湖南省に出かけた発注主のロシア商人たちは工程に口を挟む隙すらなく、「観察者に終始する」しかなかったという。その結果、上質茶を購入しようとする彼らの試みは失敗に終わった。ロシア人が茶の生産と加工を実際に目にしたのはこの時が初めてであり、「観察者に終始」せざるをえなかったは当然の結果だろう。ポポフはロシア商人の出張と中国人生産者への

33 Н. С. Романов, *Иркутская летопись, 1857-1880г., Продолжение "Летопись" П.И.Пежемского и В.А.Кротова*, Иркутск, 1914, С.17, 19-20, 23, 25-26, 28-33.

34 水野幸吉『漢口 中央支那事情』富山房、1907年、p.415. 現在「漢口」という地名はなく、武漢市に吸収されている。

直接指示が失敗に終わった原因として、原材料費を受け取った中国人が製茶費用を安くあげようとし、できるだけ多くの利益を得ることに腐心したためと指摘している³⁵。

ここで同時代の中国茶の産地を示すフレブトフの地図(図1)を挙げておく。この地図では湖北省・湖南省を挟むように、東西に赤く色づけされた領域(下記の図版では色が濃い部分)があり、ここが主な茶の生産地とされている。湖北省・湖南省は揚子江沿いに茶



図1 中国における茶の生産および中国全図

出典：A. Н. Хребтов, Чай: В историко-географическом, ботаническом и физиологическом отношении: С полтипажем и картою чайных плантаций. СПб., 1873.

35 К. А. Попов, О чае и его приготовлении русскими в Китае, М., 1870, С.22-24.

を含む様々な商品が集散し、揚子江を通じて内陸と沿海地域を結び、上海港へ通じる交通の要衝にもなっていた。最初の中国視察で失敗を経験したロシア商人たちが製茶業のために進出したのが、この湖北省・湖南省であった。

最初の視察における失敗の教訓から、ロシア商人たちは製茶に関する技術の完全習得が必要不可欠と判断し、まず請負人に原料となる茶を市場価格で購入させ、中国人工場主に対して磚茶に加工する費用のみを渡して製造する方法へと切り替えた。さらに1863年にはイヴァノフ Иваноф、オクロフ Оқулов、トクマコフ Токмаков³⁶の3商人が湖北省の崇陽（Цунян, C'hung-yang）において共同で茶の加工用工場を借り、そこで磚茶製造を開始した³⁷。茶の輸入専門商社として「オボーリン・トクマコフ商会」が設立され、漢口、揚子江沿いを基盤に茶の輸入に従事した³⁸。同年には「リトヴィノフ商会 S.W. Litvinoff & Co」も設立された。後にトクマコフはオボーリンとの提携を解消し³⁹、1866年に「トクマコフ・モロトコフ商会 Токмаков, Молотков и Ко / Tokmakoff, Molotkoff & Co」と改称した⁴⁰。

当初ロシア人の磚茶製造工場では蒸気機関も利用していたが、ほとんどが手作業に頼っていたという。それでも圧縮作業員22-24人、大工5人、計量作業員12-15人で1日1回の圧縮作業を行い、磚茶45-50箱を製造できた。1863年には磚茶製造量が10,500箱程度だったが、1869年には77,103箱にまで増加した。この時期にはロシア人の白毫茶製造技術がまだ未熟だったこともあり、その生産量は限られ、磚茶製造に特化していた。1869年の磚茶生産額は480,730ランラン [=半両銭]、97フィンフын [=銭]と記録されており、1870年の為替レートによると、1,249,900ルーブル52コペイカに相当した。その間ロシア人が借りた磚茶製造工場の数徐々に増加し、1869年には湖北省だけで12工場、湖南省に3工場があった⁴¹。

以下は先述のポポフの著書に記載されている、製茶工場設立地とその数である。ただし、

36 イヴァン・フョードロヴィチ・トクマコフ（生没年不詳）を指すと推測される。キャフタ市の第一ギルド商人。

37 磚茶は茶を圧縮して固めた固形茶であるが、いわゆる茶葉だけではなく、枝や屑葉なども一緒に圧縮している場合があり、けして品質が良いとは言えなかった。

38 К. А. Попов, *О чае и его приготовлении русскими в Китае*, С.24.

39 オボーリンのその後について、ソコロフなどの事典には情報が記載されていないが、П. А. Бонноマリヨフが刊行したパンフレットによると、1882年にオデッサで茶の販売事業を行っていた「アドリアン・イヴァノヴィチ・オボーリン」という商人の名がある。П. А. Пономарев, *Русская фабрика, Плиточный чай первой русской фабрики в Китае, П.А.Пономарева в Ханкоу, испробованный, одобренный и рекомендованный Военным министерством и ординарным профессором Военно-медицинской академии А.Бородиным*, М., 1882, С.4.

40 Lee Chinyun, "From Kiachta to Vladivostok", p.199; ОПИ ГИМ, Ф.122, Ед.64, Л.7-об., 9, 10, 11, 12, 13-об., 14-об., 15-об., 16-об., 17-об., 18.

41 К. А. Попов, *О чае и его приготовлении русскими в Китае*, С.22, 25.

地名がロシア語表記であるため、現時点で中国語表記と一致させて特定することができていないことを断っておく。

表1 中国におけるロシア商人所有の製茶工場（1869年）

省	ロシア語表記による地名	工場数	計
湖北省	Цун-Ян (ツン・ヤン)	3	12
	Янлоухун (ヤンロウフン)	3	
	Да-Шапен (ダ・シャペン)	1	
	Сянин (シャニン)	2	
	Мяцяо (ミヤツャオ)	1	
	Яндзя-ман (ヤンジャ・マン)	1	
	Ши-мын (シ・ムイン)	1	
湖南省	Недеш (ネデシ)	1	3
	Лайсчин (ライスチン)	1	
	Сяйшам (シャイシャム)	1	

出典：K. A. Попов, *О чае и его приготовлении русскими в Китае*, С.25.

漢口の製茶業に従事したロシア商人の中には、昔から茶貿易に従事していたペテルブルクとモスクワの商人がいた。表1のデータを提供しているコンスタンチン・アブラモヴィチ・ポポフ（1814-72）は1840年代からペテルブルクのネフスキー大通りで茶を商っていた商人で、1843年にはモスクワのクズネツキー・モストに進出して弟シメオンとともに「ポポフ商会 К. и С. Поповы」を開いて茶貿易に従事し、天津条約後は湖北省と復州に製茶工場を借りた⁴²。それだけではなく、1861年にドイツ、ベルギー、ハノーファー、イギリス、フランスへ商用旅行を行い、茶栽培の技術習得と茶貿易事業の拡大を図った⁴³。創業者であるコンスタンチン自身は1872年に亡くなったが、ロンドンで銀行を経営していたドイツ系イギリス商人ブランド（後述）の回状資料から、1882年前後に同社がフランスでも取引をしていたらしいこと、1888年に漢口に支店を構えたことなどが分かっている⁴⁴。

このようにそれぞれのロシア商人が活発に茶貿易事業を行っていたと同時に、中国での磚茶製造事業が順調に成長したが、その背景にはロシアにおける茶の関税引き下げが徐々に進んだこと、ロシア社会の下層労働者にまで喫茶慣習が広がったこと、より安価で低関税の磚茶需要が増大したことがある。

一方、1869年にスエズ運河が開通し、1871年にオデッサ港へ最初の広東茶が正式に輸

42 С. Фоменко, *Абрикосовы*, М., 2011, С.45-47.

43 И. А. Соколов, *Чаеторговцы Российской империи; Биографическая энциклопедия (с добавлением членов их семей, предков и потомков)*, М., 2011, С.181.

44 Вt 1/1/11 (January 1882-December 1884); Вt 1/1/13 (1887-1888)

送されたことを契機に海路経由の茶の輸入が開始され、ロシアの茶の輸入量は倍増していった（グラフ1参照）。統計数値の増加は、従来ロシア西部国境から大量に密輸されていた茶が、ようやく正式に許可された輸入品として貿易統計に表れたためである。

こうした中、1878年2月、漢口駐在ロシア副領事を務めたパーヴェル・アンドレーヴィチ・ポノマリョフ（1844-83）⁴⁵が金融省宛てに以下の報告を行った。曰く、モスクワのトラペズニコフ商会⁴⁶から受け取ったメモ書きを通じ、イギリスで特別圧縮製法による磚茶製造が始まったことを知り、急いでロンドンに発って工場を視察した。この製法でできた茶は香りなどを失わず、中国でロシア人が製造しているものより遥かに上質だった。そこでポノマリョフはロンドンでイギリス式機械を購入したという⁴⁷。当時、ロンドンにはモスクワ商人ボトキンを始めとするロシア商人が茶貿易の支店や事務所を構えており、海路による広東茶輸入のため情報を収集していた。

李今芸は*North China Herald*など同時代の英語雑誌を調査し、その情報からロシア人の工場では従来の磚茶よりも比較的持ち運びやすく、屑葉を取り除き良質茶葉を選別して圧縮した「タブレット茶 *плиточный чай*」が発明されたと指摘している。この「タブレット茶」製造に導入された圧縮製法が最新の「タール製法 *Goudron process*」であり、そのためにロシア人の製茶工場では近代的なイギリス製機器を導入した⁴⁸。この「タブレット茶」は旅行中も壊れにくいため消費者に人気を博したという。

先述のポノマリョフ報告が示すように、ロシア商人は漢口を拠点とする自社の磚茶製造に近代的技術を導入し、生産効率化を図ると同時に、中国製茶業そのものの近代化の端緒を開いた。1870年代を通じて漢口駐在ロシア副領事も務めたポノマリョフは、それまで共同事業を行っていたロジオノフ、ハミーノフの製茶会社株を1876年に買収し、「ポノマ

45 ポノマリョフはイルクーツクの同業組合員の家に生まれ、若いころから父親を手伝ってろうそく・石鹼の製造を行っていた。しかし父アンドレイの死を機に、同じくイルクーツク商人で中国の茶園・製茶業を営んでいたН. Л. ロジオノフ（1824-1903）、И. С. ハミーノフ（1817-84）の会社へ1867年に加わり、1871年に漢口へ移住した。

46 モスクワの茶商人には「トラペズニコフ」が複数いるが、参照したロシア国立歴史文書館（РГИА）の記録には明示されていない。ただし、ロシア商人との取引が多かったドイツ系イギリス商人銀行家ブランド家Brandtの記録と照合した結果、A.トラペズニコフ商会は、創設者がイルクーツク第1ギルド、モスクワ第1ギルド商人、名誉市民のアレクサンドル・コンスタンティノヴィチ・トラペズニコフ（1821-95）である可能性が高く、条件に該当すると考えられる。同人物は1860年代からモスクワに在住して工場経営や茶の取引に従事した。Brandt Circular, Bt 1/1/15 (1891 & 1892); Bt 1/1/17 (1895 & 1896); Н. Г. Гаврилова, “Александр Константинович (Трапезников),” Д. Я. Резун, Д. М. Терешков (гл.ред.), *Краткая энциклопедия по истории купечества и коммерции Сибири*, Т.4 (С-Я) К.2, Новосибирск, 1998. С.9-10.

47 РГИА, Ф.20, Оп.5, Д.297, Л.4-5.

48 Lee Chinyun, “From Kiachta to Vladivostok”, p.203.

リョフ商会」に改称した。さらにロシア政府とも密接なパイプを持ち、ロシア軍にも磚茶を納入したり、日本、オスマン帝国、ヨーロッパとも取引を行ったりした⁴⁹。それだけでなく、彼は漢口にあって安価な茶の関税引き下げにも尽力したという。

図2はポノマリョフ工場で製造した「タブレット茶」を宣伝する12ページほどのパンフレットの表紙である。ここには「新しい」磚茶が軍医アカデミー教授の推薦を得ているこ



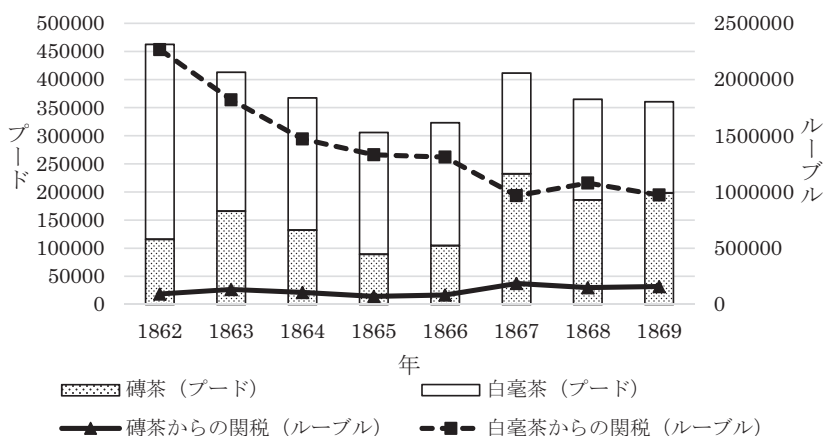
図2 ポノマリョフ工場のタブレット茶、その他の宣伝パンフレット

出典：П. А. Пономарев, *Русская фабрика, Плиточный чай первой русской фабрики в Китае*, П. А. Пономарева в Ханкоу, испробованный, одобренный и рекомендованный Военным министерством и ординарным профессором Военно-медицинской академии А.Бородиным, М., 1882, С.1.

49 П. А. Пономарев, *Русская фабрика, Плиточный чай первой русской фабрики в Китае*, П. А. Пономарева в Ханкоу, испробованный, одобренный и рекомендованный Военным министерством и ординарным профессором Военно-медицинской академии А. Бородиным, С.5-6; Н. Г. Гаврилова, “Пономарев Павел Андреевич,” Д. Я. Резун, Д. М. Терешков (гл.ред.), *Краткая энциклопедия по истории купечества и коммерции Сибири в четырех томах*, Т.3, Кн.3, Новосибирск, 1997, С.35-36.

と、1878年からロシア、ヨーロッパ向けに製造を開始したこと、江西省（Цзянь-си）、湖北省（Хубэй）、湖南省（Хунан）の茶樹を原料に生産されていることなどが記されている。このタブレット茶が本格的に「市場」に登場したのは1880年であった⁵⁰。

1870年以降のキャフタは、海路輸入解禁によって茶を輸入する唯一の合法的窓口ではなくなり、税関もイルクーツクに移された。一方で、漢口におけるロシア商人の製茶業・貿易事業が成長するとともに、製造された磚茶は陸路でキャフタ、シベリア、ヨーロッパ・ロシアへと輸送され、経由地のイルクーツクで記録された（グラフ2）。特に1867年以降は磚茶製造が軌道に乗ったこともあり、その量は白毫茶の輸入を凌駕するようになった。



グラフ2 イルクーツク税関経由の茶と関税収入

出典：Краткий очерк возникновения, развития и теперешнего состояния наших торговых с Китаем сношений через Кяхту, С.75.

3. ロシアの茶貿易ルート拡大と漢口の役割

漢口の繁栄は開港以前から培われた中国内陸部の流通と生産構造によるところが大きかったが、1860年以降のヨーロッパ諸国との貿易関係で見ると、揚子江による河川交通と結びついた上海の開港にも大きな影響を受けた。

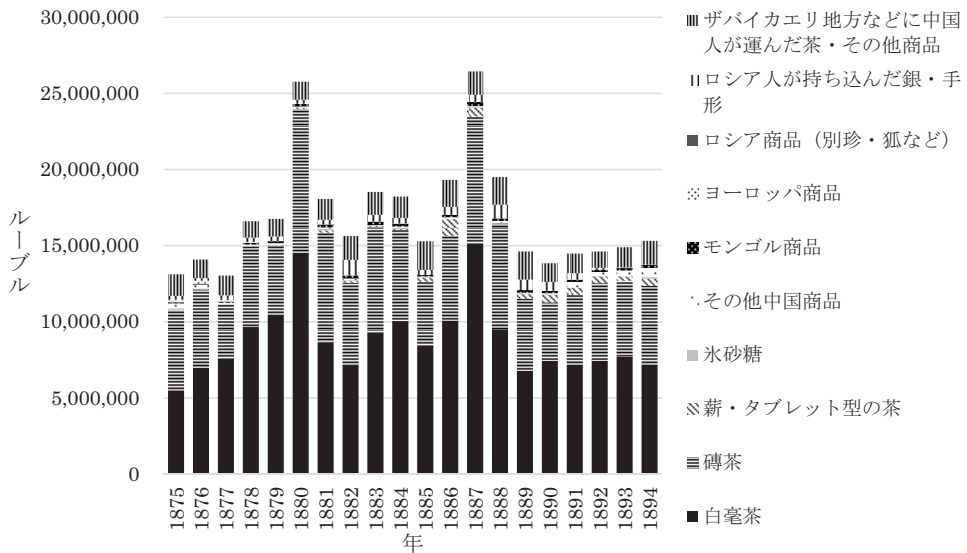
ロシア向けの茶は、まず漢口とその近隣周辺から運ばれた茶を船に乗せ、揚子江を下って上海に行き、そこから天津へ航行し、さらに北京まで運んだ後、陸路でウルガ、キャフタへと到着した。キャフタからは河川交通などを利用し、イルクーツク、ニジニー・ノヴゴロド、モスクワへ茶が運ばれた。ロシア帝国内でモスクワは茶の最大消費地であり、「キャフタ茶」の終着点であった⁵¹。このルートはすでに漢口開港以前からキャフタ貿易

50 К столетию чайной фирмы В.Перлов с сыновьями 1787-1887г., М., 1898, С.64.

51 ロシアへの茶の海路輸入が禁止されていた時期には、モスクワからさらに陸路でベテルブルクへ

のために利用され、1860年の開港以降は、イギリス船籍、ドイツ船籍、ロシア商社の船を利用してロシアに茶を運んだ。1870年代以降キャフタの貿易額は増減を繰り返しており、1880年には2,577万ルーブル強に達したものの、その後2,000万ルーブルを切った。1887年には再び2,645万ルーブル強に増加したが、翌年には1886年の水準に戻った（グラフ3）。

1880年の増加は先述のタブレット茶の登場も影響していると推測されるが、78年の義勇艦隊設立と、漢口からの船舶輸送ルートを独自に確立したことが大きな要因として考えられる。「義勇艦隊」はクリミア戦争後にモスクワ商人有志が設立した。同艦隊は船を4隻所有し、1883年に運んだ茶は4,400トンに上り、その後も増加した⁵²。歴史的に義勇艦隊による輸送はあまり評価されていないが、1880年代以降、海路による茶の輸入がさらに増加したことは事実であり、ロシア帝国の茶の輸送ルート拡大は新たなビジネス・チャンスを生んだ。一方、モスクワ商人は漢口ーキャフタ経由か、スエズ運河ーオデッサ経由か、どちらか一方の貿易ルートに依存した訳ではなかった。例えば先に挙げたポトキン家の場合、19世紀後半から20世紀初頭に至るまで漢口に茶の発注を続けており、「ピャトコフ・モルチャノフ商会」「チリコフ商会」「A. JI. ロジオノフ商会」「トクマコフ・モロト



グラフ3 キャフタ経由の露清貿易（ロシア輸入）

出典：Статистическая свeдeния об оборотах сухопутной торговли России с Кмтаем через Кяхту с 1857 по 1894 год и торговли Китая с другими государствами за последние годы, М., 1996, С.2-11.

茶が運ばれた。

52 原暉之『ウラジオストック物語』三省堂、1998年、p.46.

コフ商会」などを通じて茶を輸入していた⁵³。トクマコフは1863年の磚茶工場貸借以降、汽船事業に乗り出して様々な商人と事業提携を行った。

しかし義勇艦隊の事業は常に順調だったわけではなく、政府は1886年に「義勇艦隊臨時規則」を制定して船舶輸送を奨励している。キャフタ経由の露清貿易が1887年に増加しているのは、義勇艦隊への支援も少なからず影響していると思われる。その後1890年代にかけてキャフタ経由の陸路輸送はしばらく横ばい状況が続いた。

上記の時期にキャフタに運ばれた茶は磚茶が多かった。しかし1870年代半ばから末にかけて白毫茶の輸入額が飛躍的に増加した。海路によるスエズ運河、オデッサ港経由の白毫茶輸入が可能となっていたことを考慮すると、漢口においてロシア商人の工場が白毫茶製造を増加させたこともキャフタ経由が増えた一因と考えられる。

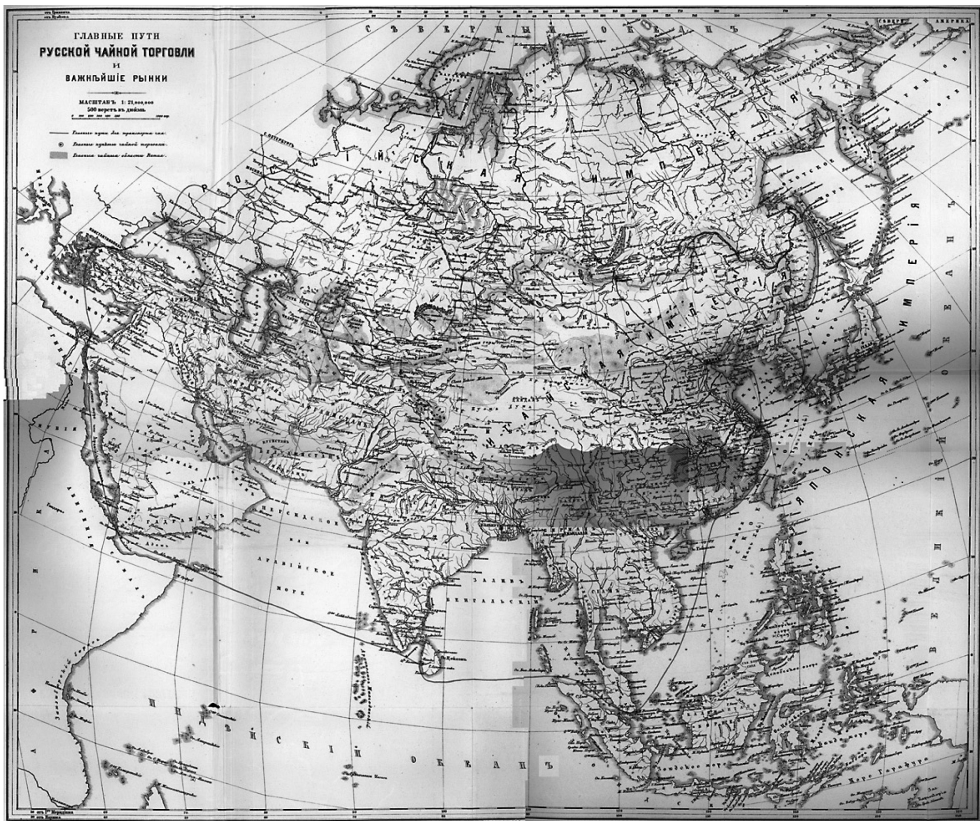


図3 ロシアの茶貿易ルート

出典：А. П. Субботин, Чай и чайная торговля в России и других государствах. Производство, потребление чая. СПб., 1892. (巻末添付地図)

53 ОПИ ГИМ, Ф.122, Оп.1, Д.63, Л.10-об., 17, 19-20об., 23-24.

同じくこの時期茶貿易に重要な役割を果たしたのが、ドイツ地域の都市フランクフルト・アム・マインからロシアに移住したモスクワ商人フィリップ・マクシミリアン・フォン・ヴォガウ（1807-80）⁵⁴ だった。ペテルブルクとモスクワの染料取引から出発したヴォガウは、繊維産業に関わりつつ茶の取引にも参入した。彼はオデッサ経由の茶の輸入事業にいち早く反応し、ロンドン、インド、セイロン、中国、インドネシアから直接海路経由で輸入するルートを開拓した人物として知られる⁵⁵。しかし彼は同時にキャフタ経由の陸路輸送も利用し、そのために非常に広い取引網を構築した。ドイツ系商人であった彼は、同じくモスクワ在住のドイツ系商人バンザ家、マルク家など、ロシア在住外国人商人間の事業提携を積極的に行い、保険業、更紗製造業へと乗り出した。

非常に興味深いことに、ロンドンにおけるヴォガウ家のネットワークには、ドイツ系イギリス商人のブランド家の銀行が関わっていた⁵⁶。William Brandt's Son & Coを経営したことで知られるブランド家は、単にイギリスのドイツ系商人ただただけではなく、19世紀初頭からアルハンゲリスク、ペテルブルクの貿易に従事し、19世紀半ばには一族のオーガスタス・フェルディナンド（1835-1904）がロンドンで金融業に転じた⁵⁷。その後もブランド家はアルゼンチン、アメリカ合衆国、イギリス、フランス、ドイツ地域など、欧米を中心に金融面で幅広い取引関係があった。そうした中でもロシア商人との取引は継続しており、ブランド家の回状資料から、「トクマコフ・モロトコフ商会」やリトヴィノフらとも取引があったと推測される。

このような貿易ネットワークを利用し、ヴォガウ家、バンザ家、マルク家、ロンドン在住の暫定モスクワ商人シューマツハが資本参加して茶をロシア国境から輸出する初の専門商社「キャラバン（Караван）」を1892年に設立した。これら出資者を結び付けていたのは同じ「ルター派プロテスタント」宗派に属しているドイツ系商人という社会的特性だった⁵⁸。このことから、ロシア正教を基本とするモスクワ商人と、モスクワ在住とはいえ新参外国人商人であるヴォガウの取引網はかなり異なっていたと推測される。

54 ロシア名はマクシム・マクシモヴィチ・ヴォガウ。

55 И. А. Соколов, *Чаеторговцы Российской империи; Биографическая энциклопедия*, С.62-67.

56 Brandt Circular, Bt 1/1/12 (December 1884-December 1886)

57 S. Thompstone, "Brandt, Augustus Ferdinand," *Oxford Dictionary of National Biography*, 25 May 2006 (<https://doi.org/10.1093/ref:odnb/48862>)

58 ЦИАМ, Ф.16, Оп.126, Д.131, Л.1-об., 3-4。「キャラバン」の前身となっている「ヴォガウ商会」は1840年に設立され、その出資者は5名のコンパニオン、すなわちコンラド・カルロヴィチ・バンザ、グーゴ・マクシモヴィチ・フォン・ヴォガウ、ドイツ臣民モーリッツ・フィリップ・マルク、モスクワ第1ギルド商人でサンクト・ペテルブルグ在住のマクシム・カルロヴィチ・フォン・ヴォガウ、暫定モスクワ商人でロンドン在住のエヴリン・シューマツハ、と記載されており、全てルター派に属するドイツ系商人である。このうちマルクはドイツ臣民であり、完全な外国人商人だった。

以上のように、1860年代以降におけるロシアの茶貿易は、漢口、上海、天津、キャフタ、イルクーツク、モスクワを結ぶ貿易ルートを重要な基礎としつつ、1870年以降海路輸送を拡大していった。しかしこのことは漢口におけるロシア商人の活動と、貿易拠点としてのキャフタの役割を妨げるものではなかった。なぜなら中国茶の集散地、輸出港としての漢口の役割は20世紀初頭まで継続したからである。

漢口駐在日本領事だった水野幸吉は、1907年刊行の資料において、1901-1905年の外国の茶商18社とその取引高について触れている⁵⁹。これら外国商社の中で圧倒的比重を占めていたのはイギリスであり、早くからイギリス租界が存在したことにより優位性を保っていた。イギリス商社に続き、中国語で「新泰」「阜昌」「順豊」「百昌」「源泰」「巨昌」と称されるロシア商社6社と、フランス商社1社が残りを占め、茶の輸出港としての漢口ではイギリス商人、続いてロシア商人の活動が中心であったことが分かる。上記の漢字名称はあくまで中国における表記であり、これらをロシアの商社名と照合すると以下のようになる（表2）。

表2 漢口におけるロシアの茶商社

中国名表記	ロシア商社名	茶の取引高（箱）				
		1901	1902	1903	1904	1905
新泰（Xin-tai）	トクマコフ・モロトコフ商会	54,788	57,172	110,541	78,364	106,378
阜昌（Fu-chang）	モルチャノフ・ペチャトノフ商会	122,110	76,135	96,200	108,732	97,760
順豊（Shun-feng）	リトヴィノフ商会	98,449	85,979	69,805	73,889	80,322
百昌（Bai-chang）	ポポフ兄弟商会	52,201	51,507	52,379	57,839	16,483
源泰（Yuang-tai）	ナクヴァシン・ヴェルシャニン商会	8,188	15,064	20,474	15,810	3,504
巨昌（Chu-chang）	不明	14,424	18,270	10,495	—	—

出典：Lee Chinyun, "From Kiachta to Vladivostok", pp.208-209；水野幸吉『漢口 中央支那事情』pp.422-424 ※商社名は李の表記を、データは水野の数値を参照した⁶⁰。

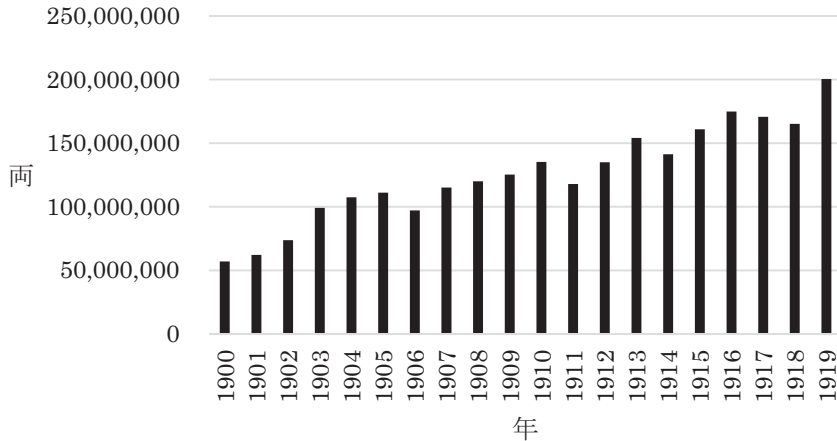
上記の表から、2節で挙げたロシア商社のうち、1901年時点で名称が変わったり、消えたりしているものがあることが分かる。ロシア商社の変動がある中で、同じ企業家が安定して事業を継続しているのは「トクマコフ・モロトコフ商会」「モルチャノフ・ペチャトコフ商会」「リトヴィノフ商会」であった。

一方で、1900年から1919年まで再輸出を除く漢口の輸出入貿易純額は全体的に増加傾向であり、1900年の57,050,639両から、1919年の200,398,431両まで、ほぼ4倍に増加した

59 水野幸吉『漢口 中央支那事情』pp.422-424.

60 李今芸氏が上記論文で参照した『漢口駐在班調査報告書』第105巻、1906年、pp.42-43のデータは、ここで用いている水野幸吉『漢口 中央支那事情』pp.422-424のデータと数値が微妙に異なっており、要検討である。ただし、数値の傾向そのものはあまり変わらない。また、これらのロシア商社の中国語表記の確認には同僚である東洋史研究者の井上充幸氏に協力を仰いだ。

(グラフ4)。これには揚子江の河川輸送だけでなく、1906年に開通した京漢鉄道により北京への陸路交通が開け、シベリア鉄道と連結されたことも影響している。



グラフ4 漢口輸出入貿易純額統計 (単位：両)

出典：『大正八年 漢口日本商業會議所年報』漢口日本商業會議所、大正八年（1919年）、p.9.

漢口の貿易データをさらに分析すると、1910年から1919年の輸出入内訳で輸出が常に輸入を上回っており、茶以外の工業製品も含めて輸出港としての性格が強いことが特徴であった。逆に輸入は中国の貿易港の中でそれほど多くはなく、1910年時点で上海、天津、広東に次いで4位だった。その後1912年には漢口の輸入額が広東を上回り、第3位に上昇するが、第1次世界大戦期から大連が貿易港としての地位を向上させ、1917年に漢口を上回った⁶¹。このように、漢口は輸出入それぞれで異なる役割を果たしたが、清朝滅亡後も貿易港としての重要性はほぼ変わらなかった。むしろ、1919年は長期の大戦終了によって、それまで不足していた外国製品の輸入が一気に増加し、漢口は未曾有の好景気に沸いた。こうした市況から、漢口の日本商業會議所はロシアの茶専門商社について、「阜昌洋行 (=モルチャノフ・ペチャトノフ商会) 茶倉庫隆茂」と繁盛していた様子を報告している⁶²。

こうした漢口とロシア商人の良好な貿易関係は、海路輸送ルートと並んで広大なロシアの茶貿易網を成立させていた。しかしその関係はロシア革命を契機に突然終焉することになった。

61 『大正八年 漢口日本商業會議所年報』漢口日本商業會議所、大正八年（1919年）、pp.12-13

62 『大正八年 漢口日本商業會議所年報』 p.1

4. 露清貿易の終焉と茶貿易

辛亥革命後、1912年に成立した中華民国は清朝の政治機構を受け継ぎつつ、地方勢力を北京政権下で統制しようとした。このような政治的混乱がヨーロッパ諸国の政治的・経済的介入を促進し、第1次世界大戦の勃発にもかかわらず、中国の主要貿易港における取引額を増大させた。この時期に漢口からロシアへ輸出された商品の規模については、各国別関税額の比較統計を基に推測することができる。まず、1915年における関税負担額はイギリス船が1,565,787,695両で第1位を占め、続いて日本船が1,314,663,390両であった。ロシア船は中国船に次いで4番目であるが、関税負担額は196,720,871両と、イギリス船のほぼ8分の1に過ぎなかった。さらに翌年にはアメリカ船の関税負担額がロシア船を抜いた。ところが1917年になるとロシア船の関税負担額は急増し、日本船、イギリス船にほぼ拮抗する1,136,661,277両に達した⁶³。

1917年におけるロシアの関税負担額増加は戦時中の軍隊における茶の供給増加と、これに起因する茶の輸入増加が要因の一つと考えられる。しかし第1次世界大戦がほぼ終息した1918年にはロシアの関税額が200万両台に転落し、1919年には記録が見られなくなった。これらのデータから、少なくとも1918年時点でロシア船による茶の輸送が減少し、鉄道などによる陸路輸送が増加したとも考えられる。また第1次世界大戦中の敵対国ドイツからの海路攻撃の可能性もあったが、当時中華民国政府はドイツとの断交によって漢口のドイツ租界を回収しており、影響がそれほど大きかったとは考えられない。実際、1917年にはロシア船の関税額が急増し、ロシア船による茶の輸送も増加したと考えられる。

しかし、1918-19年にロシアの関税額が減少した最大要因はロシア革命によって生じた政治的混乱である。漢口の茶産業も、ロシアへの輸出が不安定となったこと、アメリカへの茶の禁輸措置によりその方面に輸出ができなくなったことで、深刻な打撃を受けた。

先述のヴォガウ家は、ロシア革命勃発前の1915年に黒百人組によるボグロムの壊滅的被害を受けた。これは第1次世界大戦中のロシアの交戦国ドイツへの憎悪が引き金になったと見られ、このためヴォガウ商会は資産を売却せざるをえず、1916年に事実上活動が途絶えた⁶⁴。茶の専門商社「キャラバン」もこの時点で消滅した。一方1920年、北洋政府はソ連政府と新たな取り決めを行い、ロシア租界を回収した。これによりロシア商人は中国における茶貿易の拠点を失った。さらにソ連政府はグルジア、アプハジア、アゼルバイジャンなどで茶の試験栽培を行い、1936年にはクラスノダール地方で栽培を開始した。これに加え、中国茶からインド茶への輸入転換により、ソ連は中国との茶貿易を事実上終了させた。この結果、帝政ロシア時代に培われた茶貿易のネットワークは、第1次世界大

63 『大正八年 漢口日本商業會議所年報』 p.25

64 И. А. Соколов, *Чаеторговцы Российской империи; Биографическая энциклопедия*, С.62-67.

戦後の政治的変動によって断絶した。清朝滅亡と中華民国およびソ連の成立、その後の満蒙問題の発生という政治変動は、ソ連・中国間に「帝国」とは異なる新たな政治的・経済的関係の構築をもたらした。

以上、1860年代以降におけるロシアと清の茶貿易について検討した。その歴史的経緯から判明するのは、19世紀後半におけるロシア商人の製茶業は非常に活発であり、世紀末には中国人仲介業者に依存していたイギリス商人の中国茶取引を凌駕し、ドイツ系ロシア商人として活動したヴォガウ家などの外国系商人を通じ、ロシア商社の茶貿易が海陸による広範な茶貿易ルートを形成したことである。

ヴォガウのような外国系商人の活動は目立つだけでなく、実際に大きな事業に成長しているが、ポポフ商会のようにフランスとつながりを保ちながらヨーロッパ市場に積極的に進出したロシア商社も存在した。漢口で最も大きなロシア商社を運営したトクマコフの名も茶貿易資料に頻繁に登場する。これらのネットワークを見る限り、李今芸氏が指摘するようにロシア商人が「ロシア市場にしか関心を持たなかった」というのはいささか実態と異なるのではないだろうか。彼らは「ロシア市場にしか関心を持たなかった」というよりも、イギリス商人らの力が強かった中国市場で制約を受けつつ、キャプタ貿易によってそれまで蓄積した商業知識や経験を活かし、1860年代以降の漢口市場へ食い込むことで、その利益を確かなものにした。辛亥革命の時点でロシア商社の活動はそこまで打撃を受けなかったが、ロシア革命の勃発はロシア商社の基盤を完全に崩壊させ、社会主義政権の確立が「自由な企業活動」そのものを終焉させた。しかしすでに喫茶慣習が定着していたロシアの貿易の矛先はその後インド市場などへ向い、新たな茶の輸入先を開拓した。つまり、露清間の茶貿易終焉の要因はロシア・清両帝国でほぼ同時期に起こった革命であり、必ずしも商人側の「関心」だけの問題ではなかった。

この問題から浮かび上がるのは、世界経済緊密化の延長線上で「ロシア帝国」の商人の経済ネットワークがグローバル化したこと、イギリスなどヨーロッパ諸国の商人との競争関係、ロシア商人・外国商人（特にドイツ系商人）それぞれの得意分野の住み分けによる貿易構造の変化、急激な技術・製造業の近代化、ないしはヨーロッパ化である。これは外国商人に依存していた18世紀のロシア貿易の在り方とは根本的に異なる、新しい貿易構造の出現であった。中国市場との関係は天津条約以降により複雑化し、海陸ルートによる貿易が活発化した。現在も「海洋国家」ではなく「大陸国家」と見なされるロシアはイギリス、アメリカ合衆国のような海運業から大きく出遅れていたが、19世紀後半に確立したロシア商人の活動はユーラシア大陸全体を包摂する広がりを持っており、けして狭い範囲にとどまっていたわけではない。

しかしロシア商人の活動は社会主義国家ソ連の成立という体制転換と、それに伴う社会的混乱に対応することができなかった。それと同時に、こうしたグローバル化の流れの中

断・停滞させたのは第1次世界大戦と革命によって生じた世界経済の構造変化であった。ここにロシア商人を含む貿易商たちが持ちはじめていた経済的越境性と、それを妨げる政治的限界が存在したのである。

本稿は科研費基盤研究C「近代ユーラシアにおけるロシア商人と茶貿易」（代表：森永貴子、2013-2015年）および、科研費基盤研究C「19世紀ロシア茶貿易とグローバル市場：会計帳簿の分析」（代表：森永貴子、2017-2019年）の研究成果である。

また本稿執筆にあたり、中国の地名・商社名との照合について、同僚である立命館大学文学部東洋史学専攻教授・井上充幸氏に助言をいただいた。この場を借りて深く感謝を述べたい。

キーワード キャフタ、漢口、湖北省、製茶工場、ロンドン、磚茶、モスクワ商人、ドイツ系商人